



見知らぬ
夫婦

川崎ゆきお

それは遠い時代のある一家の話だ。

「お前もそろそろ嫁を迎えねばならぬ。我が家の跡取りが絶えるのでな」

「はい父上」

「そこでだ。丁度良い具合に縁談がある。組頭の清原様の紹介じゃ、断るわけにはいかぬ」

「断りたくなるような縁談なのですか」

「浅野家の娘だ。悪い縁ではない」

「あ」

「もう分かったであろう。人には好みがある。意外な好みもある。どうだ。お前はと思う」

「一緒です」

「何が」

「同じ感想です」

「それを言うな、顔など見なければいい」

「はい」

「どうしても、嫌か」

「礼を欠きますが……」

「欠いてもいい。清原様は話せば分かる。それで断って妙なことになることはない。よく出来た方じゃ。いつも私は世話になっておるしな。ここらで恩を返したい。しかし、お前がどうしても嫌なら、その旨伝えよう。清原様も、それなら縁がなかったと思い、許してくれよう」

「しかし、父上の立場が」

「それはいい」

「考えてみます」

「その時間はない」

「ああ」

「顔など見なければいい。後ろ姿を見ておればいい。それに名家浅野家と親戚になる。子が出来れば、私の孫であると同時に、浅野家の孫にもなる。浅野家は没落したとはいえ当家よりも上。お前の将来はそれで決まる」

「しかし」

「嫁ぎ先がないのじゃ。お前が断れば、もうあとはない」

「本気で考えます」

「それがよからう。声は良い。だが性分に少し問題があるが」

「知ってます」

「その性分、顔よりも悪い」

「はい」

「口が軽く、噂ばかりを立てておる。言いふらすのが好きなのじゃ。悪い噂の出所は全部あの娘から出たようなもの。他家の暮らし向きなども言いふらす。あの口は何とかならんかと思うておったが、嫁にすれば解決する。さすがに我が家のことは言いふらさんだろう。我が家だけが安全になる」

「はい、それは考えようですねえ」

「そうじゃ、乗り気になったか」

「それほど乗りませんが、悪い条件ではありません。あ、いや、悪いです。悪いです。やはり……」

「顔のことは見なければよいと言っておるだろ」

「しかし」

「私の妻、つまりお前の母御じゃ。あの香奈と外で合っても誰だか分からん」

「え」

「もう何十年も香奈の顔を見ておらんかったのでな」

「あ、はい」

「だから、やっていけた。お前もやっていける。私が保証する」

「あ、はい」

その後、浅野家の娘と祝言を挙げ、そこそこ平穩に暮らせた。

ただ、嫁も夫の顔をよく知らないようだ。そのため、道ですれ違っても互いにすぐには分からないとか。

了